

# 方向

第七七号 一九八八年一月二〇日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向 社

照 珍 律 師 (二) 赤 谷 明 海

へ一、照 珍 伝 に つ い て

〔住持〕 受戒について述べたので、灌頂についても触れるべきであるが、これは次章に譲り、所住の寺院と、各寺に於ける業績を挙げておこう。照珍の住持した寺は多く、『伝』には

文禄二年朝廷降諭旨。命主泉涌寺。於是其道大震。声誉日馳。慶長十年受請居南都招提律寺。繼往京兆之法金剛院、自是屢遷寿徳。善法。金剛。伝香諸刹。

と七大道場に歴住した事を記している。是については次の如き照珍『住持記』一紙（法金剛院蔵、元禄頃慧中写）がある。

八幡寿徳院 実海（善法寺僧開山也） 実如（第二代） 照海和尚（第三代） 照瑜（第四代） 照珍長老

（第五代 初善法律寺住）

南都伝香寺 照珍（三十三之年遷）

北京泉涌寺 照珍 年三十九二入院

南都招提寺 照珍 五十一之年入院 慶長十一年丙午

北京法金剛院 照珍 年五十八之時入寺 辛亥 極月朔日 同堂元和四年（午）建立

八幡金剛寺 照珍 年六十三 元和三年巳二月晦日入寺

元和五年（己未）五月十二日 照珍（在判）

これは住職就任の順を追うて記されたようで、「初善法律寺住」とは、単に善法寺に住んでいたというだけのものではなく、寿徳院住持となる以前に善法寺を主管したものと解釈すべきであろう。ところでこれを裏付ける資料が殆どなく、『南山教観名目』を写した奥に

天正四年仲冬下旬二日（八幡善法寺之僧）比丘光照（夏五 年廿二）

とあるのは、善法寺所住の僧であることを示すにすぎないと考えられ、又照珍像の銘文等によって善法寺の第二十代であることは明かであるが、第十九代の詮純長老の示寂は天正二十年であるから、この時、跡を襲ったとすれば、伝香寺住持よりも後のこととなり、その頃の資料に善法寺の名は全然出てこない点からもそれは筋が通らない。従つて今のところ、善法寺の世代を継いだ時を明示することができず、又それを他に譲つた時もおきりしない。善法寺は実相上人円照の開基にかかり、同寺の僧実海の開いた寿徳院とは特に関係が深く、寿徳院に入寺した照珍は両寺の間を常に往来し、天正年間詮純の譲りを受けて住持の名義をもつたものと思われる。然し、ここに止住した期間は極めて短かつたようである（註）。

（註）『記』に云う「元和元年十一月六日為善法先住堯清公三十三年之還忌。即於律寺。大修法事。」はへも？年月不詳の『石清水八幡宮前善法寺門跡舜清肖像供養表白』（照珍艸）によつて類える法会も、後世請ぜ

られて赴いたものであろう。因にこの先住。堯清も門跡。舜清も、善法律寺の先住ではなく、八幡宮の僧官で、善法寺家の人々である。

次に寿徳院であるが、前掲の住持記によって、照珍が第五代であるとしても、第四代の照瑜の伝が明かでないため、これも住持の年月が詳かでない。照珍の筆になる『照瑜大徳三十三回忌理趣三昧表白』（法金剛院蔵）が現存するが年代を欠き、『寿徳院過去帳』には天正六年没の前住秀興大徳を載せているが、この秀興と照瑜とが同一人であるとはにわかには断じ難い。ただ既出の『寿徳院光照記』の跋に

天正八年八月十日八幡受徳院相似比丘光照

とあるのは、既にこの頃住持していたものとみて差支えがなく、『無常呪願作法』の奥書にある

天正十三年三月五日於唐招提寺西室写之 寿徳院光照（十三年三十一）

も、同様であろう。すれば大体天正七、八年頃、照珍年廿五、六才頃には、寿徳院を董していたものとする事が出来よう。しかし修学時代のこと、この寺に止住するよりも、師を求めて泉涌寺、招提寺、高野山等を歴訪することの方が多かったようで、現存する写本等の奥書はすべてそうした他寺に於いて記されている。そしてこの時代までが光照と称した時期である。

この寿徳院を退いたのは、三十三の年、天正十五年のことである。その年泉装から伝香寺のことを依頼されて奈良に遷っている。遷るについて、寿徳院を他に譲ったものか、それとも名義を兼ねていたのかは明かでない。但し兼ねていたとしてもそれは長期間に亘らない。

伝香寺は筒井順慶の母が、順慶の菩提のために建立した寺で、開山は泉装律師である。天正十三年八月十一日に供養が行われている（泉装筆『伝香寺供養願文』）。泉装の示寂が天正十六年五月であり、死の到るのを自覚したのか、その前年に照珍を伝香寺に住まわせている。照珍はここを長く止住の場所とし、泉山、招山に出世するようになってからも、変りがない。現存の記録から伝香寺での動きを探ってみると、先ず文禄二年の夏泉装師の肖像を画かして、親交のあった東福寺の月溪聖澄に讀を依頼し（註一）、慶長七年には伊賀の十王堂の供養に出かけ（註二）、慶長十一年正月には伝香寺に於いて唐招提寺念仏会願文を写し（註三）、同年五月には舍利講式（註四）、十月には『別受法則』を写している（註五）。慶長十四年には興福寺賢聖院悲母一周忌を勤め（註六）、翌十五年には興福寺最勝（福力）院母儀三十三回忌を勤めている（註七）。また年記がないが当寺に於いて『高哲神儀十三回忌理趣三昧表白』（註八）を弴し、興福寺蓮成院に造立された御堂供養のための曼供導師を勤め（註九）同院懷算僧都の請によって理趣三昧の導師にも趣いている（註一〇）。慶長十六年にはここで『六物図』を講じ（註一一）、十八年には『伝香寺仏舍利伝記』一卷を製し（註一二）、十九年にはこの文に重修を加えている（註一三）。そして、これからは伝香寺での動きが記録の上に現われて来ない。法金剛院へ生活の本拠を移したためであろう。照珍に次いで伝香寺三代となった人は、照盛であり、第四代が照薫である。二人共筒井家の家臣大津氏の出身で、照盛は照珍の直弟子とは見えず、照珍が法金剛院に移った慶長十六年十二月頃から照薫の後見役のような形で後をついだものと思われる。照薫の住持の年時については明かでないが、照珍『分衣道具目録』に見える臨終の看病者たる「伝香寺」は彼でなければならず、当時二十三才の彼が寺を譲られていた

と考えられる。照珍は照盛や照薫に後を托してからも、招提寺へ登山の際等はこちらに落ちついた模様で、遺言状〈註13〉には、伝香寺長老坊方の年金の処置に言及している。

〈註11〉唐招提寺藏覚明長老筆『宗要集』所収『前住象耳和尚肖像讚』

〈註12〉唐〈招提〉寺藏照珍筆『十王堂供養願文』十王堂は伊賀上野の十王寺、筒井家の建立にかかる。慶長七年九月六日供養。

〈註13〉唐〈招提〉寺藏照珍筆『念仏会願文』奥書

〈註14〉唐〈招提〉寺藏『舍利講式』奥書

〈註15〉大谷大学藏円岩写『別受法則』の奥書

〈註16〉法金剛院藏照珍艸『懺へ?』誦文』

〈註17〉法金剛院藏照珍艸『表白』

〈註18〉法金剛院藏

〈註19〉法金〈剛院〉藏照珍艸『興福寺蓮成院新造立御堂供養導師法則』一帖

〈註20〉法金剛院藏照珍艸『理趣三昧表白』一帖

〈註21〉刊本『仏制比丘六物図私鈔』跋

〈註22〉唐招提寺藏覚明筆『宗要集』所収

〈註23〉伝香寺藏照珍撰并書『伝香寺舍利縁起』

〔註13〕法金剛院蔵 三通現存し、寛永五年十月弟子中に宛てた分にこの記載がある

孤山雁信

— 赤谷明海書翰集 —

(一一一)

原田憲雄編

★1977.9.6. 安藤智純氏宛。手紙。

昨日はお便り拝見、今日は燈節到来、続いて谷口氏が清水保孝作白磁茶碗を届けてくれました。過分の御配慮恐縮です。

どんなお暮らしやお伺いもせず、先般前川さんに尋ねた程度、甚だ無沙汰のまままで失礼しています、但しこれはいずれこへも同じ、四月末に退職した挨拶状も ええい面倒くさい 年賀状と一緒にしてしまえといった調子、そのままになっています。

御手紙では小生の毎日が研究三昧で大きい成果を期待しておられるようですが 甚だ御期待に副いかねる暮しです。

待ちに待った退職の日が三月末では十九年十一月にしかならず、四月末日付で願いを出したため、四月は何の仕事もせず月給を貰うことになりました。これが片腹いたいと、その金で賄えるような印刷物を出して返してやろうと考えたのがそもその誤り。「平安百年のあゆみ」に洩れたものを書く積りだったのが、だんだん欲が出明海上人行状記を残すことに転じてしまいました。いずれ長命は保し難い、ここらで甥や姪への遺言でもしておこう、幸い更に生命があればやりかけた律宗史のこま切れでも手がければよいが…ということになった次第。そ

ういう訳で、目下原稿用紙に向つて凡そ社会的には何の価値もないことを毎日々々書き綴っています。書けば書くほど無駄な出費が増す理窟ですが、老いのくどさを矯めることもできず、今二〇〇枚余りになりましたがまだ軍隊生活のところですか。早く印刷にかからねば年を越してしまいますので気は急くのですが、昨年無理をして胃に穴をあけた経験がありますので、健康を気づかないながらの作業、はかがいきません。それに想出集ではなく日記、手帖、アルバム等で年時を確かめての作業なので筆は走りません。

いま学校では研修日制度が行われて週一日の研修日をとっています。小生は逆手に週一日の研修日と称して外出し、平安を覗き、あそか診療所へ行き、習字塾へ廻っています。あとは家にこもっています。愛犬クニが死んだので朝の散歩の相手がなく、マラソンを始めましたがもうやめました。腰から足にかけての痛みが再発して立っていることが苦痛ですから。

まあ 以上のような生活、この本が仕上がらないことには落ちつけません。尚、唐招提寺戒学院の資料利用方を申し入れましたが 出寺の時の感情がまだ尾を曳いているのか あっさり拒否されました。東大寺図書館の方へ廻ろうと思っております。

清水君の白磁、玉露、煎茶共に用いられる大きさ、今までの竹泉、竹軒のものがキズだらけですので代えて愛用させていただきます。

三日ほど前「月下美人」二花が同時に開きました。見に来よと伝えられぬ距離が残念です。庭の手入れは退職しからの方が怠けています。杉苔次第に衰えてきました。家内も学校を辞め、お花に凝っていますが、弟子は二

人だけ、看板をかけさせろ、チラシを配ろうかと小生を悩ましています。

以上私事のみ。の饒舌、御勘弁下さい。いづれ仕事が終わりましたら毛筆で恐惶謹言とでもまいらせませう。皆様によろしく。九月六日夕

★1977.10.29. 同宛。葉書。墨書。

その後お変わりありませんか。茶壺の口切りの頃とききましたので粗茶少々お送りしました。平安学園と私と題する雑文、印刷にかかりましたが、原稿はまだ終わっていません。山鳥の尾の如く長々しく、無駄のない文章を綴ることのむずかしさを痛感しています。年内には御笑覧に供せると思っています。不

★1978.2.25. 同宛。手紙。

拝復、わざわざ毛筆書きの御手紙いただき有難うございます。此方も机上に硯箱を置いていますのでそれを使うべきですが、慣れないために書くべき文章と筆の運びが一致せず、ついペンをとるようなことになってしまいました。

あのような私事に亘るくりごとをよくも終りまで辛抱強く読んでくれたものと、まず感謝します。愛尽涅槃なんて語を辞書にまであたられたのは貴殿より外はありません。〈唐招提寺〉前長老〈北川智海和上〉の略伝が仏教大辞彙に補れている由、竜大綱、富山房発行のものと思えますが、こんどの執筆に当って平田君に調査を依頼したのですが、今度会ったらとつちめてやります。かくの如く貴殿がおらねばソゴをきたす、だから跋文の如く「誇張や虚言はしなかつた」ということになります。強いて虚言を捜せば史料綜覧全巻は「但し第十六巻欠」



が正しいということぐらいでしようか。この十六巻は最近入手しましたので今は揃っています。

鳴原氏の望郷詩片出版祝賀会は昭和四十二年十月二十八日のこと。土曜日で仰せの如く燃林房で開いています。

その帰途木屋町六角辺の卒業生のいる酒場二軒を廻っています。貴殿も一緒だったかどうか、それはついては記録していません。「平安学園と私」と題しながら、竜大時代のところで日記にとらわれて些事に亘りすぎたため平安再就職以後は日記を見ず、ただメモでサーッと流してしまいました。「平安教員悪業録」でも執筆する時には精読することになりますが。「めしひのひじり」原稿、御入洛の節にでも御高覧に供します。

正月以来、肩の痛みと左足腰のシビレ、痛みのため近くの診療所へ注射と電気照射に通っていましたが、注射のあとの紫色斑痕がわれながら余りにもいたましく、二十五本程でやめてしまいました。その後流感にやられ、床の中の生活ばかり、今朝やっと床をあげたところです。春になれば定期的に釣り竿をかついで宇治川まで歩くことを考えています。買ひこんであるあの本この本を読まねばならないし、例の中途半端のままの延暦僧録にけじめをつけねばならず、まだ二、三年の生命はほしいです。

里内先生 守山の病院に入院中、看護人の話では恍惚の人とか。故選君と見舞いに行く約束をしながら風邪のため延引中、小島幸登老女史も入院中。意気のよい話はさっぱり伝ってきません。この間電話で申しあげた通り、南海の鯨の潮吹きのにき澁漉たる朗報の到来をお待ちします。 二月二十五日 赤谷生 安藤智純様

★1978.3.3 同宛。手紙。墨書。

今日は桃の節句、幼い頃 豎に長い出前持ちのような手提げ箱に組重を入れて 田圃の中で 仲良し共が集って

宴席をもった記憶があります、旧暦の頃ですから 四月三日だったのでしよう 正に桃花の季節ですが 今日のところわが家は梅の第一花が咲こうかどうかどうしようかと思索しているようなところですよ

あのような拙著のため数度お便りをいただき 靈節まで頂戴し恐縮千萬です

あたふたと校正しましたため随処に誤植がありますが 御指摘の本常長老の世代は誤植ではなく小生の不用意な誤りです。本常―覚明―智海という師資関係ばかりが頭の中にあつて 機械的に逆算して世代を決めてしまい甚だおはずかしい事です 軽い気持でサアと筆をとったものが 活字になると恐ろしいもので あんな世代まで確かめられるお人がいようとは思ひもかけない事でした 小生が今まで折にふれて招提寺関係の系譜をメモしてきた範囲では本常長老の師もはっきりしません、招山塔中弥勒院（本常代より応量坊と改称）の世代では七才程年少の道静の後を襲っています、他から入つて道静より先に長老職についたのかもしれない 道静の次の常寛は塔中能満院や牟尼蔵院の住持だった人ですが この人の師も不明です。ともかく幕末から明治初頭にかけての小生のメモは甚だ乏しく律門伝燈史でも纏める時がありましたら招山のこの時期をはっきりさせねばならないでしょうが そんな時が来るかどうか。

尚、焼失した壬生寺本堂のところ、「文化何年かの寄進銘」とか書きました文化が或いは文政だったかもしれない これも調べたら判るのでしょうが そこまでの労もとらず、歴史にかかわる者として許さるべきでない態度です 但し校史資料に主眼をおいたものとして大目に看過ねがいとうございます。

待望の春もどうやら近い様子、冬眠から立ち上がってポツポツ仕事にかからねばと思つていますが御承知の通り

のズボラ者 如何相成りますやら。

暖かくなったら御上洛願いたくその節には是非御連絡下さい 親御様によろしく

三月三日

赤谷生 安

藤智純様御机下

★1982.11.10. 同宛。手紙。墨書。

八ツ手の花が咲き始めました 愈々冬に入るようです その後如何お過しですか 境内の落葉掃きに出精の毎日  
でしょうか

先日見慣れた筆蹟で清水保孝氏個展の案内状が舞いこみましたので参観に出かけました 保孝氏らしい顔を見かけましたものの誰かと話し中でしたので挨拶もせず故宮博物院展へ出向きました

抽象画風の黒刷毛目に亀を配したのが目立ちましたが それだけに文様がひとり歩きしているのではないか、こんな意地悪い見方をしています

大崎家に保管して貰っていた茶が到来しましたので少々お送りします 昨年同様飯岡イノオカの産ですが 味の方は甘さが劣るような気がします 試みて下さい

六月に家内と東北へ旅をし、松島で安物のぐい呑を買ってきました、茶や缶に入れようかと思いましたが余りの  
仕事とおこられそうなのでやめました 他日拝眉の折まで残しておきます

尚、磯女史の叔母小松みどりさん十月二十六日亡くなりました 十一月十日 明海 安藤智純様

★1984.2.23. 同宛。手紙。墨書。

拝啓 今年は殊の外寒さきびしくその上毎日々々の雪空、当地でも移住以来はじめて雪かきというものを二度も経験しました。然し数日来陽気俄かに動き出しましたので早速柿の木に登って剪定を済ましたところですが、只今は春らしい雨が降り続けています。

このところ御無沙汰ばかりで失礼してありますが如何お過ごしでしょうか。御両親の御様子は如何ですか。議員勤めを兼ねて御多忙なお暮らしてでしょうか。

本日小包便到着拝受いたしました。「紺碧の海」の匂いがかがせていただき有難うございます。また女房に尻をたたかれ削り器でゴシゴシやることになりました。

共に平安に居りました頃からあさっておりました延暦僧録の逸文蒐集。もう目に触れる事はあるまいと校異にかかっておりましたところこの程やっと終了しました。逸文字数約一一、七〇〇字あります。続いておなじ思託の大和尚伝逸文の校訂にかかることにしています。御承知の通りの怠け者、なかなかハ力がいきません、貴兄が近くにおられれば釈義についていろいろご教示に与れるのにと残念です。

お水取りがすむまで度々寒の戻りがあります。先は御礼券々近況御報告まで。 二月廿三日 明海 安藤智純様御座下

※前号正誤 第六九号 二頁の行に『大正新脩大藏経』の略称を（正蔵）としましたが（大正）と改めます。  
第七六号 二頁の行 チャトクマー→チャートクマー

シャーリプトラ達にちなみ『論語』を想起させるとするのは、「マハーゴーシング・スッタ」『南伝大蔵經』九では「牛角林大經」と訳する經典に載せる、次の話である。例によりわたしの言葉に直して紹介する。

あるとき釈尊は、「牛の角」とよばれるサーラ（沙羅）樹の林においてになった。多くの有名な長老の比丘、すなわちシャーリプトラ、マハーマウドガリヤーヤナ、マハーカーシャバ、アニルツダ、レーヴァタ、アーナンダをはじめとするシュラーヴァカ（声聞）達と一緒にだった。

マウドガリヤーヤナは、夕方、黙想から起ちあがり、カーシャバの所にゆき「カーシャバさん、法を聞きにシャーリプトラさんの所へゆきませんか」といった。カーシャバは「いいですね」と答えた。そこでマウドガリヤーヤナとカーシャバは、その場にいたアニルツダも誘って、シャーリプトラの所へ行った。

アーナンダは、マウドガリヤーヤナがカーシャバ、アニルツダと共にシャーリプトラの所へ法を聞きに行くのを見た。そこでレーヴァタにいった「あの人達はシャーリプトラさんの所へ、法を聞きに行くのですよ。わたし達もゆきませんか」。レーヴァタは「そうしましょう」と答えた。というわけで、レーヴァタとアーナンダもシャーリプトラの所へ出掛けた。

シャーリプトラは、レーヴァタとシャーリプトラが遠くからやって来るのを見ていう「いらっしやいアーナンダさん、いらっしやい。先生の侍者であり、側近者であるアーナンダさん、牛の角のサーラ樹の林は、美しく楽

しいですね。夜は月が輝き、サーラの花は満開で、とってもいい匂いです。ところで、どんなビクがここに住めば、この牛の角のサーラ樹の林をさらに耀かせることができるでしょう」「そうですねシャーリプトラさん。ここにビクがいて、あらゆる機会をとらえて教えを聞き、聞いたことをよく覚え、聞いたことを積み重ね、初めも善くなかばも善く終わりも善く、筋道が通り、言葉うつくしく、完全にととのった清浄の梵行を説き示すようにしましょう。そのように一切の法が聞かれ、保たれ、言葉で習得され、心で思索され、見識をもって洞察されたうえで、大衆の悪習を断ち切るために、穏やかで快い言葉で法を説くとしましょう。シャーリプトラさん、このようなビクが牛の角のサーラ樹の林を耀かすでしょう」

これを聞いたシャーリプトラは、レーヴァタにいう「アーナンダさんが、心にひらめいたままを述べてくださった。レーヴァタさん、牛の角のサーラ樹の林は美しく楽しいですね。夜は月が輝き、サーラの花は満開で、とてもいい匂いです。どんなビクがここに住めば、牛の角のサーラ樹の林を耀かせることができるでしょう」「シャーリプトラさん、ここにビクがいて、黙想を好み、黙想を楽しみ、内部の心が静止するように修行し、座禅して身体を調えることを軽んぜず、観察を成就し、静かな処を好むとしましょう。そういうビクこそ牛の角のサーラ樹の林を耀かすでしょう」

これを聞いたシャーリプトラは、アニルツダにいう「レーヴァタさんが、心にひらめいたままを述べてくださいました。アニルツダさん、牛の角のサーラ樹の林は美しく楽しいですね。夜は月が輝き、サーラの花は満開で、とってもいい匂いです。ところでどんなビクがここに住めば、牛の角のサーラ樹の林を耀かせることができるでし

よう」シャーリプトラさん、ここにビクがいて、清らかで人並すぐれた天眼で千の世界を見通し、眼力のある人が高樓に登って地上の千の車の輪を見極めるように、はっきり見るとしましょう。シャーリプトラさん、このような人なら牛の角のサーラ樹の林を耀かせるでしょう」

これを聞いたシャーリプトラは、カーシャバにいう「ア Nil ッダさんが、心にひらめくままを述べてくださった。カーシャバさん、牛の角のサーラ樹の林は美しく楽しいですね。夜は月が輝き、サーラの花は満開で、とてもいい匂いです。どんなビクがここに住めば、牛の角のサーラ樹の林を耀かせることができるでしょう」シャーリプトラさん、ここにビクがいてみずから林に住み、林に住む生活を讃え、みずから托鉢し、托鉢生活を讃え、みずからほろ衣を着、ほろ衣着用を讃え、みずから欲少なく足るを知り、少欲知足を讃え、みずから独居して世俗に染まらず、精進して戒・定・慧を完成し、戒・定・慧を讃え、みずから解脱し、解脱の知見を讃えるところとしましょう。このようなビクが牛の角のサーラ樹の林を耀かせるでしょう」

これを聞いたシャーリプトラはマウドガリヤーヤナにいう「カーシャバさんが、心にひらめいたままを述べてくださった。マウドガリヤーヤナさん、牛の角のサーラ樹の林は美しく楽しいですね。夜は月が輝き、サーラの花は満開で、とてもいい匂いです。どんなビクがここに住めば、牛の角のサーラ樹の林を耀かすことができるでしょう」シャーリプトラさん、ここに二人のビクがいて、勝れた法について談論し、たがいに問いを出しあつては、また答えあつて、厭きることがないとしましよう。こういう法談は有益ですが、このようなビクこそ牛の角のサーラ樹の林を耀かせるでしょう」

ここでマウドガリヤーヤナがシャーリプトラにいった「シャーリプトラさん、わたし達はみんな心にひらめくままを述べました。こんどはあなたの番です。シャーリプトラさん、牛の角のサーラ樹の林は美しく楽しいですね。夜は月が輝き、サーラの花は満開で、とってもいい匂い입니다。シャーリプトラさん、どんな人が住めば、この牛の角のサーラ樹の林を耀かせることができるでしょう」「マウドガリヤーヤナさん、ここにビクがいて、心を征服するが、心に征服せられず、どのような境地であろうと、朝とどまろうと思えば朝とどまり、昼とどまろうと思えば昼とどまり、夜とどまろうと思えば夜とどまる。そしてそれがちやうど、王者が色々の服を入れた筆司を持っていて、どんな服であろうと朝に着ようと思えば朝に着、昼に着ようとおもえば昼に着、夜に着ようと思えば夜に着るようだとしよう。マウドガリヤーヤナさん、そんなビクなら牛の角のサーラ樹の林を耀かせることができるでしょう」

さて、シャーリプトラはビク達にいった「皆さん、わたし達はみな心にひらめいたことを述べたのだが、これから先生の所に行って報告し、先生がお話しくださることを守って行くことにしようではありませんか」

皆は賛成して釈尊のおられる所に行った。シャーリプトラが代表して、彼らの対話を、繰返し説明した。

釈尊は、それを聞き、一人についての話がおわることに、彼の言葉をそのままに彼の特色として批評された。たとえば、「シャーリプトラよ、じっさい、アーナンダは、あらゆる機会をとらえて教えを聞き、聞いたことをよく覚え、聞いたことを積み重ね、初めも善くなかばも善く終わりも善く、筋道が通り、言葉うつくしく、完全にととのった清浄の梵行を説き示すとすれば、一切の法が聞かれ、保たれ、言葉で習得され、心で思索され、見



識をもって洞察された上で、大衆の悪習を断ち切るために、穏やかで快い言葉で法を説く人だ」というふうには。

すべての人に対する批評が終わったとき、シャーリプトラは釈尊にたずねた「先生、誰の言ったことが、いちばん善かったでしょうか」「シャーリプトラよ、あなたがたすべての言葉はみな善かった。さて、あなたがたもまた、わたしの言うことをお聞きなさい。ここにビクがいて、食事の後、托鉢から帰り、体をまっすぐにし、目の前に念いを据え、結跏趺坐し、『わたしは執着が無くなり、煩惱のけがれから心を解脱し尽くさない限り、この結跏趺坐を解くまい』と決心するでしょう。シャーリプトラよ、このようなビクが牛の角のサーラ樹の林を耀かすことができる」

こう釈尊が説かれたので、かれらビク達は歡喜して釈尊の教えを信受した。

以上は、もとの經典を三分の一に縮めたもので、原文のアルカイックで、しかもものびやかに優雅なおもむきは消えてしまった。それでも「牛の角のサーラ樹の……」というリフレインを、気の短い人は煩わしいと感ずるだろうか。現に高楠記念会訳では二度目から「……」印で省略してある。しかし、インドの、なお太古の趣をたたえる曠野、あるいは森林で、涼しい月影の下、このような物語を朗々と吟誦するのを聞くときには、幾度くりかえされても厭わしくはなく、かえって音楽の主題が重ねられるに随い興趣が拡大するように、喜びはたかまり、楽しみが深められるのではないだろうか。

この話は南伝だけではなく、北伝でも、『中阿含經』「双品牛角沙羅林經第三」(大正・一)『增壹阿含經』「六重品第三十七之一」(大正・二)『生經』「仏説比丘各言志經」(大正・三)につたえる。『中阿含』の所

伝では、ビクの名にマハーカーティヤーヤナが加わり、その他にも異同があり、伝えた時代・地方・部派の違いなども考えられ、これはこれで大きな研究課題ともなるが、わたしがビクの伝記を読み返すのは『法華経』が彼らと深い関わりをもち、無視しては『法華経』の理解に欠けようかと察するからである。

『法華経』の注釈・解説の多くは、經典巻頭の列名をさっと通り過ぎがちで、それは一つの見識であろうが、天台大師の『法華文句』が丹念にビク伝を拾うのは、尊重すべきであるように、わたしには感ぜられる。もっとも、ここでわたしの拾う伝記は『法華文句』のそれとは一致しない。天台大師の見ることをえなかつた南伝の諸経を参照しうること、観点が同じではないこと、などによる。

さて次は、マハーカッチャーナ。このマハーもまた美称。西インドのアヴァンティ国のウッジャヤニーという城市のクシャトリヤ、一説ではバラモンで、チャンダプラデオータとよばれる王の大臣だった。王は慢性の不眠症で、医師の進める薬はとらず、酒をあびるほど飲み、臣下や人民を殺したので、暴王といわれた。しかし王は釈尊の噂を聞き、招待しようとカッチャーナを使いに出した。カッチャーナと七人の従者は、釈尊の教えを聞き出家して仏弟子となり、カッチャーナはウッジャヤニーに帰り、王のために法を説いたので、王はかれに帰依した。かれの説法はたくみで魅力に満ち聞いて出家する者が多く、城市は新しい僧の衣で輝いたという。

「マドゥクラ・スッタ」（南伝・一一上）によれば、マドゥクラ国王のために階級差別の無意味であることを説き、王が帰依の意を示すと、「わたしに帰依せずに、世尊に帰依なさい」と教え、世尊はどこにおられるか、と問われ、「すでに完全なニルヴァーナに入られた」といったので王は「尊者カッチャーナよ、世尊がすでに完全な

ニルヴァーナに入られたのならば、わたしは世尊に帰依し、法に帰依し、ビクのサンガに帰依します」と、仏・法・僧の三宝への帰依を表明した。「マハーカッチャーナ・パッデーカラッタ・スッタ」(同・下)によれば、積尊が弟子サムリッディのために「過去を追うな。未来を願うな。現在の法を：はつきり知って修学しなさい。

：このような人を一夜の賢者、静かな人、黙想者と、ひとは讃える」という詩句を教えたが、弟子達には理解できなかった。カッチャーヤナが詳しく説明した。当否を問われて積尊は「カッチャーヤナは賢者だ。わたしに尋ねられても、カッチャーヤナのように解説しただろう」と答えた。「アングッタラ・ニカーヤ」(同・一七)にも「わたしが略説したことを広く分別する者はマハーカッチャーヤナだ」と積尊に讃えられている。ほかにも逸話の多いのだが、「マハーヴァツガ」(南伝・三)の伝える戒律にかかわる話に注目したい。

カッチャーヤナがアヴァンティにかえりクララガラ山中にいたとき、富豪の子であるシュローナ・コーテイコーティカルナが信者となり侍者として仕え、出家したいと願ったが、在家のまま修行するよう勧めた。シュローナは三たび乞い、カッチャーヤナもこれに感じて出家させたが、戒を授けるために立ち会うビク十人を集めようとしても、アヴァンティは辺地で集まらず、三年かかってやっとそろえ、授戒した。シュローナは話に聞く積尊に直接お会いして教えを受けたいと思い、師に乞うた。カッチャーヤナは許し、次の伝言を托した。

- 一、アヴァンティとその南方諸国にはビクが少ないので、授戒に立ち合うビクの数減らしてほしい。
- 二、こちらは地面が黒く牛の蹄に踏まれて硬いので、ビクが数重の履物をはくことを許してほしい。
- 三、こちらでは人々は洗浴を尊重しよく水で体をあらう。ビクにもそれを許されたい。

四、こちらでは羊・山羊・鹿の獣皮を敷具とする、積尊所在の中国（インドの中央）でエーラグなどを敷具とするように。こちらでのその習慣を許されたい。

五、こちらで人がビクに衣を与えようとしても、物を貯える過ちに触れることを恐れて受けない。だから衣の所持についての規定を示されたい。

シュローナは、中インドのシュラーヴァステイに積尊を訪い、師の願いを伝えた。積尊は五つの件につき詳しく事情を確かめたうえで、中国と辺地を具体的に指定し、辺地ではその地に即応した戒律の実行もよしとし、ヴァンティなどの南地では、カッチャーヤナの提出した五事を許した。

戒律、とひとことにいうが、戒とは、規律を守ろうとする自発的な心の働きであり、律とは、他律的な軌範を意味する。積尊を慕い自らの意思でその弟子となった人々には、それぞれの戒だけにゆだねてよさそうだが、弟子が増え、ビクの集団すなわちサンガが大きくなるにつれ、さまざまな問題がおこる。

先輩に命ぜられながら掃除をしない若いビクがいたので、先輩に命ぜられたら掃除をせよ、という律ができ、食べながらしゃべるビクがいたので食事中はしゃべってはいけないという律が示される、といった具合で、しつけのようなことから、人を殺してはならぬ、といった犯罪の防止にいたるまで、実にさまざまな箇条が、事の起る度に加えられ、『南伝大蔵経』の一から五までの五巻は、律とその由緒の集積で、「律蔵」とよばれる。

ニラを食べることが禁ぜられた後シャーリプトラが腹痛で苦しんでいる。マウドガリヤーヤナが「君はいつも何かを食べると腹痛が直ったじゃないか」と聞く。「ニラを食べるといいのだが、先生が禁止なされたので」と

の答に、マウドガリヤーヤナは積尊に告げ、薬としてのニラの食用の許可を得、もちろん律になった。この程度のこととも隨機応変で処理できないのか、といった感想が浮かばないではないが、師が定めたことはシャーリブトラには変えがたく、また長老のかれが自らの判断で変更すれば、習って律を破る者も出、ぶつぶつ非難する者も続出するのであろう。律蔵を読むと、長老ビク達の師に対する尊敬と信頼に感動するけれども、いい大人がこんなつまらぬことにまで師の判断を煩わさなければならなかつたのかと呆れる場面も少なくない。積尊の、ほおつとする気持ちが想像され、時々弟子達から離れ、森林あるいは山中で孤独を楽しんだのも尤もとうなずける。集団とはそうしたものであろう。個人として勝れた人でも集団のうちでは幼児に劣ることが珍しくはない。現存律蔵のどれだけが積尊その人から出たのかは正確には知りがたく、後に加わったものが多かろうと察するが、カッチャヤーヤナの提出した五事の扱いから察して、積尊は決して杓子定規な人ではなく、修行しやすい環境・心情を調える方法として戒律を考えていたことが推測される。だが規則はできると、目標化し、趣旨が忘れられやすい。律もまたサンガを守るより、サンガに属する人を縛り、身動きできなくさせる要素は初めからはらまれていた。積尊の在世中は指示を仰いで変更できるが、滅後はむつかしくなった。いや在世中でさえ、デーヴァグッタのように、積尊の規定がゆるすぎるとして厳格を主張し、ついにサンガを分裂させる者も出た。『法華経』の初めに招かれていないウパーリン長老は、戒律に精通し、師の積尊から「持律第一」と讃えられた。第一結集では律の誦出者となった。かれ自身は律のやわらかな運用に心掛けたことが伝記から伺える。しかし律の形式的な面での欠陥があらわになりはじめる後の時代に、律の誦出者たるかれがその責任者と見られたかもしれず、法律に

稽しい検事のように形式的にくだくだしい人と考えられたかもしれぬ。すくなくとも『法華経』を産み出した大乘教徒の間では、そのように感ぜられていたのではなからうか。

律と「形式的なくくだしさ」を結び付けるような言い方は、しかし、ただちに言う者の立場が問われることにならう。戒律を学び、インドでも中国でもない今の日本の教団の中で、具体的にどのようにならうか。苦闘し、解決を見出せずに撤退せざるをえなかった人を、身近かに見て来たわたしには、目の前に寺や檀信徒のこまごました悩みや問題を見なくてすむ者の思い切った放言はできないのである。

釈尊のように時間と空間を超えた理法を覚り、その法を宣べて人々に仰がれた人でも、身近い弟子や信者達の間のごたごたには、いったん定めた規則も、幾度か変更しなければならなかったことを思うと、天上を見通している眼も足先の小石を見落とすことがあるのだなと歎息する。釈尊は、煩わしく感じ、ときには孤独を楽しむために山林に行きはしても、弟子や信者達を捨て去ることはなく、また彼らの間に帰ってきて、どちらでもいいような小さなごたごたも丁寧に聞きただし、決まりをつけ、あるいは規則を変更したりしながら、かれらの目を理法の方に向けるように努力しつづけたのであろう。おそらくそれが、釈尊が弟子や在俗の信者達から学び、おこなった修行で、ボサツ行の原型はそのあたりにあるのではなからうか。決めた結果、変更した結果の規則としての律よりも、律を定める過程の釈尊の苦悩と忍耐を、『法華経』は、律の本質と見ようとしたのではないか。カッチャーヤナの五事をめぐる話や、ウパーリンの伝記など、律蔵の諸篇をこころしずめて読みゆくとき、微風のようにその意味がただよってくる。

アニルツダは、積尊の父スッドーダナに次ぎシヤカ族の王となったマハーナーマの弟で、積尊の従弟である。積尊が、成道後、故郷のカピラヴァストゥに帰ったとき、同族のバドリカ、アーナンダ、ブリグ、キムビラー、デーヴァダッタ、かれらの雇った理髪師のウバーリンとともに仏弟子となった。「サンガベツダカンダカ」(南伝・四)によれば、その事情は次のようである。

コーサラ国からマガダ国への途中のマツラ族の国アヌプリヤーに積尊がおられた時、シヤカ族の青年達は競つて出家した。マハーナーマとアニルツダという兄弟がいた。兄は思った。シヤカ族で名を知られた家の青年はみな世尊に従つて出家したのに、わが一族からはまだだ。わたしか弟のアニルツダが出家すべきだ、と。弟に告げるとアニルツダはいつた「ぼくはまだ小さいから家を出られやしない。兄さんが出家すればいいだろう」「そうか。じゃあ、おれの代りに家業をやってくれ。まず使用人達に田を耕させる。耕したら、種を播かせる。種を播いたら水を灌がせる。水を灌がせたら水をはかせる。水をはかせたら草をとらせる。草をとらせたら刈り取らせる。刈り取らせたら積み上げて打たせる。打たせたら藁を除き糶を除かせる。次はフイゴで選りわけさせ、穀物を取めさせる。来年もそうする。更来年もだ」「その仕事はいつ終わるの」「仕事に終わりは無いさ」「では、ぼく達はいつになったら、ゆっくりと、楽しめるの」「仕事は無くならない。終わりは無い。お父さんも、おじいさんも、仕事の終わりを見ずに死んだよ」「じゃあ、兄さんが家業をするといいよ。ぼくは出家しよう」

兄弟は母にアニルツダの出家の許しを求めた。母は許さない。三度乞われて、アニルツダの友ですでに國王となつてゐるバドリカが出家するなら許そうといった。ありえないことと思つたからである。バドリカは、初めは

断るが、アニルツダのねばり強い勧誘に、ついに承諾し、さきに記した七人で、遊樂を装い家を出、国境を出た処で持物をウバーリンに与え、帰れと命じた。ウバーリンは帰ろうとしたが「シャカ族の人は荒っぽい。青年達を逃がしたと聞いたら、私を殺すだろう」と考え、荷物を樹にかけ、青年達を追い、共に釈尊を訪ねた。釈尊はシャカ族の人は傲慢なので、矯正するため、ウバーリンを先に出家させ、その後シャカ族の六人を出家させた。サンガでは、在俗の階級・地位・年齢にかかわらず、先に出家した者を上座とするのが原則だったからである。それでも習慣がすぐには変えられず、ちぐはぐなこともあったが、教えは守られた。

バドリカは、樹の下や石の上で修行しながら、しばしば「愉快だ、愉快だ」と叫んだ。聞き付けたビク達が釈尊に告げていう「バドリカは王時代の快樂を思い出し、愉快だ愉快だ、と叫んでいるに違いありません」。釈尊が呼んで尋ねると、バドリカは答えた「私が王の時は、後宮の内であろうが、外であろうが、護衛が厳しく、城内であろうが、城外であろうが、警備が厳しく、そんなに護衛や警備が厳しくても、もしかしてと思うと、恐ろしく、うるさく、びくびくしていました。ところが、こうして樹の下や石の上で修行していると、恐ろしくもなく、うるさくもなく、びくびくすることはいらず、のんびりと楽しくって仕方がないものですから、つい、愉快だ愉快だと叫んでしまうのです」。釈尊はこれを聞いて「それはよかったね」とおっしゃった。

アニルツダは美男だった。一人旅で夜になり、泊めてもらった家の女主人に誘惑され、教え諭して女を仏・法・僧の三宝に帰依する篤い信者とした。しかし、ビクが女と同宿してはならない、という律制定のゆかりとなった。後には釈尊の最も忠実な友であり、「天眼第一」と讃えられる慧眼の人ではあるけれども。